

学生図書委員会活動報告

『なんとかなるゾウ』

一年四組 清水 汰一

「おまえなあ、このままやと2000%成功でけへんで」ダメダメなサラリーマンの前に突然現れた関西弁を喋るゾウガネーシャ、成功するために教えられたことは「靴をみがく」とか「コンビニで募金する」とか地味なものばかりで……

内容は、いわゆる自己啓発書みたいなものでした。しかしこの本では、それを実践していない人が多いことを指摘しています。

そのことによって、痛いところを指摘され「ドキッ」とする内容も多少あります。そしてそれらを実践するために勇気づけてくれるストーリーとなっています。

『大宇宙の素顔』

二年二組 木村 涼太

この本は宇宙の基本的なことを美しい写真を交えながら解説してくれる本です。

本書は2部構成になっています。

第1部は星の一生と題されており、宇宙の基礎的な知識を星の誕生から死までを通して学ぶことができるようになっています。星の一生は人生と比べるととてつもなく長い時間です。つまり、それだけたくさんの表情を見ることができるのです。

文字では伝わりにくいところを写真で確認することができ、素人である自分でも思ったよりもスラスラと読み進めることができました。

第2部では最新宇宙への招待と言う題ですが、本書が2001年に発売されたものですのでそれほど新しくはありません。しかし、先進国が北半球に多かったために観察がされてこなかった南半球から見た宇宙の姿が掲載されています。いつもと向きが反対になったオリオン座の写真が掲載荒れていて、す

ごく新鮮でした。時間に終われている今の人達は自分も含め、夜空を見ることが少なくなっていると思います。

この本には我々に宇宙への興味を生み出してくれることが沢山あります。ぜひ、ちょっと息抜きをしたいなと思った方には御一読をおすすめします。

『学習の合間に』

電子情報工学科三年 柴田 泰基

今回紹介するのは、京極夏彦氏による「百鬼夜行シリーズ」です。

内容は、次々と起こる神秘的な殺人事件を「憑き物落し」と称する人物が鮮やかな弁舌をもって解決していくというものです。

物語のテーマとなるのは「妖怪」を始めとする、「オカルト」と呼ばれた者たちです。これらを現代人の目線を持って理解し、解体していく様は科学的思考を持つ高専生にとっても面白いものとなるのではないのでしょうか。日々の学習の合間の息抜きにこれらの本を開いてみることをお勧めします。

「百鬼夜行シリーズ」以下図書館にあるもの

1. 姑獲鳥(うぶめ)の夏
2. 魍魎(もうりょう)の匣
3. 狂骨の夢
4. 鉄鼠の檻
5. 絡新婦(じょろうぐも)の理
6. 塗仏の宴 宴の支度

塗仏の宴 宴の始末 まで

学生図書委員会活動報告

『「非まじめ」思考法』

電子情報工学科四年 櫻井 勇人

ロボット工学の権威で、仏教にも造詣が深い著者が書いた思考法です。皆さんは「不気味の谷」という言葉を耳にしたことがあるでしょうか。ロボット工学において、人間のロボットに対する感情的反応について、ロボットがその外観や動作において人間らしく作られるようになるにつれ、より好感的、共感的になっていきますが、ある時点で突然強い嫌悪感に変わる現象のことです。その言葉を提唱したのもこの人です。

この本の中の一説にこんなことが書かれています。『どうやって、想像力を身につけるか。はっきり言って近道はない。修練に修練を重ね体験の中から自分でつかむしかない。われわれ日本人はどうしても真面目に偏しやすく、歯をくいしばり、目をむき、頭から湯気を立ててやるようになる。これでは創造的になれない。』『真面目と不真面目を合一した「非まじめ」で行くよう、心して自制しないと駄目である。』『どうということかと言うと、例えば、精度の高い機械を作れといわれると、誰もが、1 ミクロンの制度のものを作り出そうとするが、その前に、精度が1センチくらいの精度のものすごく悪いものを作ってみたりすると、そこに大切なヒントがあることが分かります。』

こんな「へえー」と思う逆転の発想がたくさんかかれています。この本から学んだ考え方は、とても大きかったように思います。もなさんも、工学の道を進むにしろ、人生に活かせる考え方なので読んで置いて損はないと思います。

『“文学少女”と死にたがりの道化』

(ファミ通文庫) 野村美月

物質工学科五年 飛田 良憲

この小説の優れたところを挙げますと、ライトノベルというジュブナイルよりも軽さ、エンターテインメント性が求められるジャンルで、太宰治の「人間失格」を再構成し、なおかつ学園ミステリーというエンターテインメントとして仕立てている点でしょう。もちろんその分、いろいろな安易な印章も受けるのですが、少なくとも人間失格を下敷きにしながら、「仮面を被って生活する苦悩」を表現しようという試みは、やっぱり安易すぎる。テーマとしては紋切り型で興味を惹かれませんが、かといって「人間失格」のような説得力のある鋭さがあるわけでもありません。もっともその平明さ、簡潔さはこの手の作品としてはむしろ美点とも言い得るのですが、ただ、じゃあこの作品のすべてがそうか、というと、違う。「人間失格」自体の解釈が作中で示されているのですが、そこでは教科書的でない作者独自の答えが導かれ、そしてそれが作品の芯として機能している。面白いと思います。シリーズものではありませんが、第一作ということで一番出来がいい。